



神聖かまってちゃんとマキタスポーツ

—ロックの浸透と拡散の果てに

「《美空ひばりによって完成したと思える流行歌の本道と、違う道はないものであろうか》という意識を頭に置きながら、歌作りをしてきたということです」

これは昭和の歌謡曲を代表する作詞家の阿久悠  
がいった言葉である。



歌謡界を代表する阿久悠は本流のアンチテーゼとして出てきたということがわかる言葉だ。

阿久悠は同い年の美空ひばりが中学生でデビューし、大スターになっているさまをみていて、ずっとコンプレックスを抱えていたという。同じ音楽業界に入ったことで、ますます意識してしまう存在だった。

そして、美空ひばりが歌いそうにない歌を意識して書いてきたという。

本流と思われていたものは、元々はカウンターだったという話は数知れず。時代は常に亜流によって更新されるということだ。

例えば、いまではすっかり王道アニメという印象の新世紀エヴァンゲリオンは↓

例えば、いまではすっかり王道アニメという印象の新世紀エヴァンゲリオンはその当時、アニメ視聴者的にも社会的にも徹底的な亜流だった。

主人公の男が最後までなよなよめそめそしているアニメはなかった。いま観返すと、女々しすぎやしないか？とってしまうが、放映から数年して友人からダビングしてもらったビデオを観た、中学生当時のわたしは強烈に共感した。自分の心情をこんなに代弁してくれるアニメがあったのかと感動し、すぐさまスーパーロボット大戦αを買いに走ったものだ。

しかし、学校でそのアニメのタイトルをひとたび口にすれば、クラスメイトに魔女狩りジャンヌダルクのごとくその後の学校生活は「気持ち悪い！おまえは死すべし！」と超不能になった。

本誌の仮想敵であるAKB48もそうだ。↓

本誌の仮想敵であるAKB48もそうだ。最初こそみんなバカにしていたものの、いまではテレビからも一般の人間からもウェルカムされている。

おじさんおばさんは若者の文化を受け入れている自分心が広くてカッコいいという自意識を発動させるゆえ、AKB48が若者の間で人気ですよと朝のテレビがひとたび宣伝すれば、「ふむふむ、若者にAKB話をすれば私は人間的に上位変換されるぞ。もし相手が知らなければ、若者文化に関心を示せる人間として見られるぞ」なんて思うのだ。

そして、いつの間にか本流になってしまった彼女たち。

ロック界限としては↓



ロック界限としては体制にカウンターを食らわせて時代を更新していくバンドヒストリーをアイドルに見事にとって代わられてしまった。



かといって、バンドの人気がなくなっている  
かというところでもない。



オリコンチャートにバンド勢が入ることは一〇  
数年前と比べて激減したものの、東京都内のラ  
イブハウスは潰れるどころか、増加したとい  
う。



増加したということは需要があるということだ。バンドをやる人間が増えたということだろう。日本がロックを輸入して六〇年近く。いまの若者はこの半世紀で一番バンドをやっているということだ。なんだか、すごい時代な気がしてきたぞ！

ところが、ロックの普及と拡散↓

ところが、ロックの普及と拡散とともに、共通の価値観は失われつつある。いや、失われてはいないのだが、その価値観を共有する規模をはるかに超える速度で、バンドをすることが広まりつつあるのだ！



かつて、筒井康隆はSF大会で↓

かつて、筒井康隆はSF好きが集まるSF大会で「浸透と拡散」と唱えた。



筒井康隆はSF好きが集まるSF大会で「浸透と拡散」と唱えた。七〇年代に小松左京の『日本沈没』がベストセラーになり、七七年には『スターウォーズ』の第一作が公開された。『宇宙戦艦ヤマト』もヒットし、『機動戦士ガンダム』がやってくる。この結果、SF的なものは世間に受け入れられるようになった。SF的想像力はマンガ、アニメ、文学、テレビ、映画、さまざまなものに波及するようになる。

この状況はSF業界にとっては喜ばしいことだった。

一方で、SFが普及していくことを「SFが拡散してしまおうとしている」と嘆く人もいたという。

星新一や筒井康隆、小松左京、福島正実など先駆的な作家が切り開いてきたSFの書き手たち。その一九六〇年代まで日本SFの世界が持っていた先端性が薄れ、毒が消え、大衆文化に墮していくというのだ。

↓

げんに今はSFという言葉を使って物語を説明する必要もないほど、わたしたちはSF的想像力を受け取れる。「これはSFでさあー」と言われると逆に難解さを感じてしまうからだ。



今のロック・バンドシーンと似ている。↓



もう浸透したのだろう。もうバンドは不良のものでもないし、ヒエラルキーが高い人間がやるものでもない、マニアックな人間がやるものでもない。バンドが好きじゃなくてもやれるし、アニメが好きという動機だけでもやれる。ロックの崇高な精神はなんたら～とかいうオッサン連中を根こそぎ駆逐する、そんなバンドの浸透性が現代にはある。

ロックバンドに憧れなくてもバンドが出来るのだ。↓

これはロックシーン盛り上がる！

と思ったら意外とそうでもなかった。



浸透とともに大きく拡散してしまったということだろうか、バンドは本流にカウンターをうてなくなっていた。仮想敵がないのだ。アイドルを敵にはできるが、アイドルはもはやロックフェスに出してしまう存在になったため、ロックバンドと違うものになってしまった。

今の時代、何を応援するのも個人の自由！文句をいうのはダサい！という風潮があるゆえ、仮想敵や本流を設定するのがむずかしくなってしまったのだ。ロックバンドはカウンターを打てなくなっていた。もしかしたらそれがいまロックンロールの答えなのかもしれないとも考えられる。

↓

ドドドドド！敵はどこだ！ドドドドド！おい、聞こえるか！敵はどこにいるんだ！  
ドドドドドドド！ぜんぜん見えないぞおおお！ドドドドドド！

（背後から現れる男）「敵はお前だ！死ね」

そんなふうに見えたのが神聖かまってちゃんだった。彼らはスタジオ練習の様子からライブから楽屋まで生中継した。それはライブやプロモーション、文章、会報でしか知り得なかったブラックボックスのロックバンドの素を徹底的にあらわにするものだった。

バンドがいくら自身を見せているといってもそれは編集可能なものである。人気商売だからそれはそうだ。ぜんぶ見せたらダメだという意識があるのだろう。彼らはすべてを見せた。

↓

神聖かまってちゃんはインターネット配信によって「バンドってこんなんだぜ」というブラックボックスを開いた。それまでは、他のバンドが普段どんなふうにスタジオ練習しているのかというのは知ることができなかった。その配信を観たときはこっそり覗き穴からみる感覚である。

彼らはロックバンドのその存在自体を敵としたのだ。だから、彼らはロックバンドの普段の様子ガンガン映していった。バンドを解体してみせたのだ。



彼らは自身の場であるはずのロックシーンを仮想敵とした。敵という言葉が悪くなってしまうので、言い換えるとロックシーンに対して批評を行ったのだ。

例えば、お笑い芸人のサンキュータツオは他の芸人のコントや漫才を分析する芸をする。お笑い芸人がお笑い芸人を分析していくことに、あんなのお笑いじゃねえよという批判もあるらしいがサンキュータツオはそれを言われても止めない。芸を分析批評することも芸だし、それで相手を笑わせるんならお笑いだという。彼はお笑いを解体する。

お笑い芸人のマキタスポーツはJ-POPを説明しながら解体する。その後ギターでそれらの要素を使ったユニークなオリジナル曲を演奏して笑いを生む。マキタスポーツは音楽を解体する。

ロックシーンとお笑いが共通しているところは、浸透と拡散である。↓

ロックシーンとお笑いが共通しているところは、浸透と拡散である。



関西人でなくても「ネタ」や「ツッコミ」や「台本」、「内輪ネタ」や「身内ネタ」などもはや一般人の会話のなかにお笑い世界の用語が浸透している。

お笑いの浸透によって、お笑い芸人がバラエティ番組ではもはやアウトサイド性はなくなり、ただ番組を回すタレントと化している。

俳優である坂上忍が番組をひっかけ回して爆笑をとっている様子からそれを想う。さらに、M-1やTHE MANZAI、R-1グランプリの枯れたお笑い大会感が、お笑いの浸透したすえのドン詰まりを感じさせる。

なにかを解体してみせてそれがお客さんに支持されることが同時代にべつの分野から起こったことは興味深い。

浸透と拡散の果てはきっとその分野の知能↓



浸透と拡散の果てはきっとその分野の知能指数の低下である。

SFを例にとってみると、SF的世界観は浸透したものの、SF的言語を大衆が理解しているかといえばしていない。相変わらずSFファンの欲求を満たすような作品は出るが、大衆に受けるのはライトな作品である。主導権はライトな大衆に移る。そもそものファンはマニアックと冷たく区別され、ライトが本流になってしまう。

そして時が経ち、マニアックとライトの間には目では確認できない溝ができるのだ。

日本のロックもお笑いもそうになっている。↓

日本のロックもお笑いもそうになっている。

そこでひとつの回答を出したのが神聖かまってちゃんだ。彼らは自身の分野と自分たちを解体してみせた。自分がどこから来て、何を聴いて、なにを考えていて、こういう作業を行なうことでこういう作品ができますよ、とリスナーに押し付けがましくなくみせるのだ。分解、解説、再構築だ。文脈をタネ明かしというレベルで人にみせる。

それはロックを趣向していない人間にとってロックに入り込める余地ができるからありがたい。↓

それはロックを趣向していない人間にとってロックに入り込める余地ができるからありがたい。趣向しているけどライトなりスナーにとってみれば音楽の厚みを知ることができる。それはマニアックとライトの知能指数の溝を慣らすことにもなる。サンキュータツオもマキタスポーツも同じだ。

ロックシーンは点を探そうとしていたが、神聖かまってちゃんは線を見せることをした。

彼らは分解することによってロックを更新しようとしている。

←

神聖かまってちゃんと一〇年代のロックンロール ――ロックの浸透と拡散  
の果てに

<http://p.booklog.jp/book/91463>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ